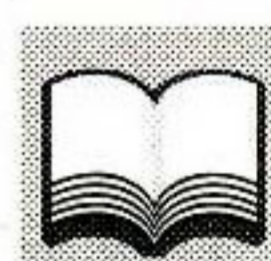


希少難病研究

iPSSバンク



希少難病 原因不明の高熱や聴覚異常などさまざまな症状がある。厚生労働省は50000〜70000疾患があると推測しているが、国内の患者数は不明。国は現在、1972年に当時の厚生省がまとめた「難病対策要綱」に基づいて130疾患を研究対象に指定しているが、ほとんどの希少難病は含まれていない。一方、要綱による医療費助成の対象も、診断基準が確立した56疾患にとどまっている。

またiPS細胞の研究を進めている東京大医科学研究所（東京都港区）からも事業協力してもらうことになっている。

患者が提供する採血量は10ミリ程度。既に手足の筋力が失われる難病「遠位型ミオパチー」を患うソルドの女性会員の血液で東海大医学部がiPS細胞の培養に成功しており、筋肉繊維を生成する予定だ。今後は他の会員（約310人）にも血液提供を求める。

佐藤准教授は「難病外の幅広い研究者に難病の研究が進まない理由の一つは、研究者が患者の生体試料を入手できない点にある。国内

【山田尚弘】

病名が判明しない「ク事業」を東海大医学部との連携で2月からスタートさせる。国内初の試みで、同月6日

回数が多く、患者の負担が大きい。医師によって病名をめぐる判断が分かれるケースもある。iPS細胞から生まれ変わった組織や臓器など

計画では、東海大医学部の佐藤健人准教授（生体防御学）の協力で患者の血液からiPS細胞を作成。理化学研究所（埼玉県和光市）に管理を委託し、国内

京都のNPO・東海大連携

どに投薬実験をし、病

筋肉繊維を生成する予

人工多能性幹細胞（iPS細胞）を難病患者

難病検査は現在、組織を採取するなどの方

定だ。今後は他の会員

の血液から作って研究

法が一般的だが、受診の組織や臓器に生まれ

液提供を求める。

に生かす「iPSバンク

法が一般的だが、受診の組織や臓器に生まれ

液提供を求める。